

1970年代初頭における「セクシュアリティ概念」受容の諸相

— Kirkendall LAの性教育論を中心に —

柳園 順子

要 旨

1970 年代初頭の日本では、世界的なウーマン・リブ運動の潮流を背景に、性に関する社会の関心が高まっていた。こうした中で 1971 年に SEICUS 創始者のカーケンダールが初来日し、全国 11 か所で講演を行った。カーケンダールは新しい時代の性教育として「セクシュアリティの概念の導入」を訴え、JASE 設立への期待を表明した。同時期は、従来、性教育に消極的だった学校保健界も時代の要請から性教育を強化する方向へと転じており、カーケンダールを積極的に紹介している。カーケンダールは後の日本の性教育啓蒙運動に刺激を与えたとみられる。本稿はセクシュアリティ概念を主体とする新たな性教育論が、戦後政府主導で推進された「純潔教育」から後の日本の性教育の主体的言説形成にどのように寄与していくのか、アメリカの概念の移入過程を歴史的文脈から問い、その接続の歴史的過程と意義を検討した。

キーワード：セクシュアリティ、カーケンダール、ウーマンリブ、JASE、
日本学校保健学会

はじめに

1970 年代初頭は政府主導の「純潔教育」からの脱却への過渡期といえ、同時期には学校保健界が介在しアメリカの性教育を摂取しようとする潮流も生まれている。本稿は、その指導者として登場したカーケンダールに眼差しを向け、アメリカの概念の移入が果たした機能を歴史的文脈から問い、日本の性教育の主体的言説形成にどのように寄与していくのか、その接続の歴史的過程と意義を明らかにすることを目的とする。

1970 年代初頭、戦後日本における性教育は大きな転換期を迎えた。女性たちの女性解放のための運動であるウィメンズ・リベレーション (Women's Liberation : 以下ウーマン・リブと略す) が 1960 年代にアメリカから始まり、フランスやドイツをはじめ世界中の多くの国でこの運動が拡大した。これら世界的な潮流に 1970 年代の日本は「性」が大きく前面に登場するであろうと、1970 年 1 月 1 日の各主要新聞の殆どが例外なく指摘した。11 月には初めてのウーマン・リブ大会が、東京の渋谷で開催された。

朝日新聞は戦後政府主導で推進された「純潔教育」に関し、文部省内で再検討が始まったことを報じた。政府は、後にわが国最初で唯一の性に関する法人として設立される (財)日本性教育協会 (THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION : 以下 JASE と略す) (1972 年 2 月 29 日文部大臣認可) の初代役

員メンバーとなる村松博雄や間宮武、朝山新一ら 6 名を性教育懇談会に招いている。そして翌 71 年に総理府は「青少年の性に関する意識調査」を実施した。その目的は、青少年の性意識の実態やその担い手である両親の知識やモラルの程度を明らかにすることであった。

新たな「性の時代」の到来に世論の関心が集まる中で、SIECUS (Sex Information and Education Council of the United States : 全米性教育協議会) の設立者であるカーケンダール、L.A (Kirkendall LA : 以下カーケンダールと略す) が来日している。1971 年秋に初来日したカーケンダールは、全国各地を訪問して講演を行い、性教育会指導者等と意見交換をするなど精力的に活動を展開した。別のグループでも研究会を開催し、カーケンダールとの交流を足場に最初の性教育展が開催されている^{註1)}。

同時期、性に関しては女子の性周期に伴う筋力及び諸機能の変化など、体育の視点から研究がされていた。また、米国における体育についての研究も活発化していた。ところが、カーケンダール来日後は 1976 年に大学生の性行動調査、1977 年には米国における学習指導要領動向の研究が報告される等、その様相が変化している。

高度成長期を経て社会が大きく変容し「純潔教育」の公共的使命が衰退しようとする中で、その舵取りの変更が余儀なくされようとしていた。今後、性をどのように扱うか新たな問いを模索する途上で、登場した

のがカーケンダールだった。

カーケンダールの先行研究には、鹿間がカーケンダールの性教育論を基に養護教諭の役割と実践を検討している。鹿間によれば、1970年代から80年代に日本の学校教育は医学的立場から教育学的立場へと移行しカーケンダールの主張が大きく影響した、という。カーケンダールはセクシュアリティの概念を確立する教育学的立場の重要性を論じ、日本の性教育に影響を与えたとしている。

また、カーケンダールがJASE発足に示唆を与えたとの指摘もある。広瀬は同時期の日本の性教育の主流言説が、戦後文部省が主導した「純潔教育」からJASE主導による性科学（いわゆるセクソロジー）に足場を置いた「性教育」へと転換する礎となった、と述べる。広瀬によれば、JASEはカーケンダールのセクソロジーの知見を出発点にすることを通し、その安定的立ち位置確保した、という。池谷は、70年代に入りJASEを中心とする性教育理論は、SIECUSのカーケンダールらによる「ヒューマンセクシュアリティ」概念に依拠するようになったとして、JASEの登場により「性＝人格」の原理が純化していったと分析している。

このように、カーケンダールについていくつかの先行研究があるが、管見の限り研究の蓄積は浅く、その歴史的文脈や性質についての検討は十分になされていない。戦後日本の性に関する教育が、社会が変容する中で何を摂取し、排除しながら、どのようなチャンネルへと接続していくのか、その内実を明らかにすることは、現在の性教育に至る道筋を解明する上で重要な課題である。

そのため本稿は、カーケンダールを焦点に①カーケンダールの性教育論、②JASEの設立、③学校保健界の動向が後の性教育の主体的言説形成にどのように寄与していくのか、その歴史的過程と意義の解明を課題とする。期間は欧米でウーマン・リブ運動が誕生した1960年代後半から政府が「純潔教育と性教育は同意語」と示す1972年までに限定する。主な資料は(財)日本性教育協会編『季刊現代性教育研究』、『財団法人日本性教育協会20年史』、日本学校保健学会編『学校保健研究』、村上賢三『日本学校保健学会20年史』、青少年問題研究会機関紙『青少年問題』、その他波多野義郎や黒田芳夫による記録等である。

1. カーケンダールの来日

1) カーケンダールと波多野義郎

本節ではまず、カーケンダールの経歴を概観する。カーケンダールは1903年米カンザス州オーバーリン市の小麦・牧場農家に出生した。小・中・高校の教員・

校長を経て、1935年に教育学を専門としてコネチカット州立教育大学で准教授に着任した。1941年にはガイダンスを専門にオクラホマ大学教育学部教授となった。1943年に教育顧問として軍に属し、1946年には家庭生活協議会主事を歴任した。その後、1949年に家族関係学の教授として、オレゴン州立大学家政学部教授に就任した。1964年にSIECUSを設立し理事に就任、1969年には同大名誉教授の称号が授与されている。

カーケンダールと日本の大きな起点は1971年の初来日である。滞日活動は1971年9月26日～11月14日に渡った。約7週間の滞在期間中、全国各地を訪問し、意欲的に講演を行った。第18回日本学校保健学会をはじめ、早稲田大学・学芸大学などで講演を行い、講演回数は11回を数えた。さらに報道5社との座談会に4回参加するなど、精力的に活動を展開した^{註2)}。

カーケンダールが日本に滞在する間、講演会・座談会など全ての公的活動を企画・調整・担当したのが、当時東京学芸大学助教授であった波多野義郎（よしろう）である。波多野は、来日中のカーケンダールの全ての言動を記録し、氏の主張の把握に努めた。わが国唯一のカーケンダールの著書・翻訳者として後に黒田芳夫とその性教育論を分析・統合し、他の指導者の主張と比較検討し日本における性教育の将来との関わりを論じた。

カーケンダールは、人道主義者、平和主義者として国際的に知られている人物であったという。徹底したデューイ信奉者であり、波多野は「ここまで徹底して人間関係を性の関わりにおいて追究した人はいない」と評価している。波多野は通訳として約50日間カーケンダールと共に過ごし、その後、その間の10数回の講演を要約している。カーケンダールの性教育を雑誌に紹介し、波多野・黒田の共著で「カーケンダールの性教育論」を発表した。

2) (財)日本性教育協会の発足

JASEは1972年2月29日文部大臣の正式認可を受け、「わが国では最初であり、唯一の性に関する法人」として設立された。同会は①性教育に関する基礎的な調査・研究を行い、内外の資料を収集・分析するデータバンクの開設、②性教育に関する研究会・講演会・講習会等の開催、③性教育に関する雑誌、図書、資料を通じて、望ましい性教育についての研究を進め、社会の向上に貢献することをめざすとした。

JASE設立の背景には、従来の「純潔教育」を脱皮し、現実に対応した「真の性教育確立」の必要性を意識する山本宣治の衣鉢をつぐ朝山新一（大阪市立大学名誉教授）や村松博雄（医事評論家）らを核とする性

研究グループによる公的機関設置への積極的な取り組みがあった。民間の協力者を求め、その受け皿提供の意思を明らかにしたのが株式会社小学館だった。同社では林史郎編集担当役員をリーダーに1971年春、斯会権威者らと接触するとともにJASE設立準備を開始し、1971年7月3日、小学館における設立総会で理事、監事、評議員等の役員を決定し、同年秋事務局をオープンした。

初代役員には、理事長に前厚生大臣（内田常雄）が就任し、常任理事に朝山新一、林四郎、村松博雄の名が並んだ。そして理事は国立公衆衛生院衛生人口学部長や厚生省人口問題研究所人口学部長、黒川義和や間宮武等、幹事は元文部大臣や集英社及び小学館幹部、大学の研究者、総務府青少年対策本部参事官や東京都教育庁指導主事などで構成された。こうしてJASEは政府との強いパイプや出版媒体等をはじめとする世論にアプローチする基盤を十分に備え、その活動を開始したのである。

JASEは機関紙『現代性教育研究』（出版社は小学館）を通して、JASEの活動をリアルタイムに発信した。その射程は教員、学校、教育委員会、医療関係者等に向けられていた。『現代性教育研究』は一般商業雑誌として販売し、発売当初は季刊誌で開始した。後に隔月刊に移行していることから、活動の意気込みが窺える。季刊から各月間へ移行することで情報量の拡大を目指し、通算58号（1983年6月号）まで発行された。1972年7月1日付で発刊された広報連絡誌『財団法人日本性教育協会月報』（同年11月より『現代性教育研究月報』と改題）は『現代性教育研究』が隔月刊化される1976年6月1日号まで発行し、通巻48号を数えた。

JASEは会の広報誌を全国の学校、教育委員会、関連諸団体に無料で郵送するなど、教育界に対して積極的にアプローチした。広報誌を無料配布することで会の認知度を高め、その主義主張の拡大を企図したとみられる。また、有料月極読者への郵送も行った。

カーケンダールは、JASE創設直前に、朝山・村山ら初代役員メンバーと懇談し、その設立を激励している。初来日後も2回来日し、いずれも同会で講演した。2回目の来日である1980年には、日本性教育協会夏期セミナーで10周年記念講演、さらに1986年に日本性教育協会設立15年記念で講演した。このように、カーケンダールとJASEは密接な関係にあったのである^{註3)}。

2. 「家族関係学」の専門家

1) 近代社会における「家族」

1971年のJASEの『現代性教育研究』創刊号及び2

号には、特別寄稿としてカーケンダールの記事が連載されている。本節ではこの特別寄稿の詳細をみていく。

前述したように、教師からガイダンスの専門家、そして性問題への研究家・カウンセラーへと進歩したカーケンダールを日本では「性教育学者」・「社会学者」・「ヒューマニスト」として受け入れようとした。しかし、カーケンダールは自身を「家族関係学」の専門家と称していた。波多野によれば、第1回の来日にあたりカーケンダールに対し「米国における青少年の性行動分析とそれに対する性教育の方法論についての展開」を聴衆の要望として依頼したが、カーケンダールから送られてきた草案は「近代社会における家族」だったという。草案は「家族」を主眼に性の考え方を論じたもので、自身を「家族関係学」の専門家と称する意図を反映していた。

初来日期间中、カーケンダールはこの草稿を中心に講演を行った。その記録を編集し特別寄稿として紹介したのが「現代社会における性の役割」（1972年）^{註4)}「現代社会における性教育の役割」（1972年）^{註5)}である。「現代社会における性の役割」の中でカーケンダールは、社会の近代化に伴う家庭内人間関係の変化を社会学的分析法によって極めて簡明に説明した。社会や家族そのものの構造や近代化に伴って根底から必然的に変質したことを中心にテーマを論じ、「これからの社会における人間関係の望ましい方向」として、新たに「セクシュアリティという概念の導入が必要」であると主張するのであった。

2) 新しい時代の性教育と性教育指導者の資格

また、カーケンダールは「現代社会における性教育の役割」の中で新しい時代の性教育を考える原則として、次の10原則を掲げている。

1. 性教育は人間的経験のすべてである
2. 性教育は人格教育である
3. 性教育は両親の態度である
4. 性教育は人生哲学である
5. 性教育は家族関係学である
6. 性教育は生命尊重の具現化である
7. 性教育は健全な発達に不可欠である
8. 性教育は無理な隠し立てはしない
9. 性教育はガイダンスである
10. 性教育は行動よりも動機を重視する

これら10原則を示し「大人こそ性教育を必要としている」ことを強調した。特に教育者やカウンセラーには、まず性教育の指導者としての資質条件を早く身に付けてもらわねばならないと考えていた。アメリカでは医科大学の正規のコースとして性教育や家族関係学の講義が設けられ、今後さらに発展が期待されていることを紹介し、日本でもこうした傾向が発達しなけ

れば、近代化の進んだ社会の中で人間関係がゆがみ、個人の疎外化が進むことになり、社会全体のマイナスになると警笛を鳴らした。その上で「性教育指導者の資格」として、次のような指針を提示した。

1. 人間教育のできる人であること
2. 発達段階に応じた指導ができること
3. 健全なセクシュアリティの概念を確立していること
4. 性に関する精神的ブロックを持たないこと
5. 健康で明るい性格の持ち主であること
6. 子どもへの思いやりがあり、個人的ガイダンスができること
7. 生徒との間に信頼関係があること
8. 「教える」よりも、共に悩んであげることができること
9. 横社会的人間関係を作れる人であること
10. 性教育の本質や内容について専門的見識を持っていること

このように、カーケンダールは性教育の実施者がまず健全なセクシュアリティの概念を確立していることが重要と考えていた。指導者側の課題を根源的に問い「性教育指導者の資格」を示すだけでなく、大学において「性教育」「家族社会学」などの講座の充実・発展させ力量を高めることを呼び掛け、両輪で展開することを求めた。そして、次のように結実するのであった。

米国における性教育は、今やっとその緒についたにすぎないといってよい。少なくとも近代化に伴う人間関係のひずみが先行しており（中略）しかし賢明な日本の皆さんは米国社会の犯してきた失敗を繰り返すことの無く、独自の文化・伝統を新しい社会に織り込んで、充実した幸福な人生を送ることのできる若者たちを育ててくれるであろうと期待している。その意味において、今回発足したJASEの責任は重大であり、その成功を切に祈るものである。

このように、JASEへの期待を表明している。カーケンダールのこうした啓蒙は、保健体育学会同窓会主催の公開講演会等でも同様に展開された。

3. 新しい理念の希求

1) 日本学校保健学会の容認

性に関する改革への期待が高まる中で、学校保健界にも変化の兆しがみえていた。ここでは学会の動向として日本学校保健学会の例を見ていく。

同学会は、戦前の全国連合学校衛生総会と差別化を

図ることを目的に、研究者が研究成果を発表する機会を提供する場として1954（昭和29）年10月に発足した。『学校衛生』（帝国学校衛生会発行）『日本学校衛生』（大日本学校衛生協会）『学童の保健』（学童保健協会）と異なる学術雑誌として『学校保健研究』を刊行している。カーケンダールは、来日中の11月4・5日に渡り、同会の第18回総会のパネル討議で講演した。

当時学会の中心人物で『日本学校保健学会20年史』をまとめた村上賢三は、従来、性教育に関心が低かった同学会にカーケンダールが登壇したことは「画期的だった」ことをのちに回顧している。カーケンダールはパネル討議で「技術文化の社会における性教育」との表題で、次のように演説した。

社会経済機構の変化に伴って家庭生活の形態が変化するのはむしろ当然である。（中略）計画産児の普及に伴って、性は単なる生殖機能の手段に止まらなくなり、性生活の基盤にも変化が生じた。性習慣が開放的になってきたのもむしろ当然である。新しい性の概念では、人生に喜びをもたらす対人関係の親密化を図るという点を基盤にしている。（中略）全ての先進国がその家族構成において同様な傾向を示す今日の世界では、新しい性の役割を確立していくことが急務である。

このように、カーケンダールは、「いわゆる伝統的な性倫理は過去の社会で通用したからという理由だけでは存在不可能」であると主張した。その上でこれからは「全ての先進国が新しい性の役割を確立していく必要がある」と促し、性教育に消極的な同会員に対し意識改革するよう一石を投じている^{註6)}。

一方の学校保健界もまた、戦前の学校衛生時代からターナーやブラウト等「アメリカの保健教育」の影響を受け発展してきた土台を備えていた。こうした歴史的発展過程から、時代の潮流への呼応として「アメリカ」からの「新しい時代の性教育」として登場したカーケンダールを少なからず受け入れる土壌があったと考えられる。

1972年1月発行の学会誌上では、1971年10月8日の健康教育懇談会の解説として波多野を通訳にカーケンダールの「学校性教育に対する基本的な考え方」がスライド付きで詳細に報告されている。この中では、カーケンダールの主張する性教育の基本原則7つが、以下のように紹介された。

- ①健康な社会観、価値観の確立
- ②性の究極目的は生殖ではない
- ③性の社会的意義の変革

- ④現代に合致した性教育を大人中心に行う
- ⑤各人が自由を行使する権利をもつという原則
- ⑥人生の満足感、充足感が性行動の決定因子である
- ⑦学校だけが性教育の場ではない

このように、カーケンダールを通して、性教育に消極的だった学校保健界の扉が次第に開かれていくのであった。

2) 村上賢三の見解

前述したように、カーケンダールの登壇は学会にとって画期的な出来事だった。村上は「L.A. カーケンダール^マ博士によりアメリカにおける性教育の考え方が述べられたことは特筆すべき」事項と受け止めていた。これに対し、次のような説明もしている。

「日本学校保健学会」においても時代の要求に答え^マしだいに性教育に関しての研究が強化されんとしている状況である。

村上は「全国学校保健大会」において性教育の問題を設け特別の研究班を設けたのが1967年の愛媛県で開催された第17回大会が最初であることや以来毎年開催される大会で小・中・高校の発達段階に応じた研究班を設け、性教育をいかに行うべきか研究討議を継続していることを報告した。同学会も時代の要求に応じて性教育を強化されようとしている事実を照らし、その必要性を提起した。その上で次のような持論を展開している。

欧米の傾向の影響は、当然わが国にも避けることができない(中略)(国内の「性教育」書の多くは)方法論に重点がおかれており、「性教育」の理念について深く検討されたものは乏しい感じがするのである。

スウェーデンのような性教育のごときはわが国の現状においてはゆきすぎであり、これをただちにとり入れることはできないと思う。

村上は、欧米の傾向の影響は当然日本も避けることができないとしながらも、性教育先進国であるスウェーデンの方法論には懸念を示し、次のように訴えている。

性の問題をいかに考えるべきか。今や性教育は方法論よりも、むしろ性教育の新しい理念を求めることがせまられているように考えられる。

このようにカーケンダールを引き合いにしながら、新しい時代の性教育に対し「新しい理念」を希求する

のであった。

4. セクシュアリティの概念の意味

1) バイセクシュアリティの肯定宣言

カーケンダールは「性は、セクシュアリティ、すなわち人格と人格との触れ合いの全てを包含するような幅の広い性の概念、という言葉でおきかえられるべき」と考えていた。そして、次のようにも述べている。

過去においては性を身体的な部分やそれに関わる行動の総称として考えてきたが、今はより広い性の概念を持ったセクシュアリティということばでおきかえられるべき

カーケンダールは「人間同士の相互関係全てがセクシュアリティの発露である」ことを主張した。すなわち、その真意は「男性・女性の組み合わせに留まらず、男対男、女対女、さらにあらゆる年齢層の対人的組み合わせにも全てセクシュアリティが含まれる」とするものだった。こうした主張に対し、波多野は「カーケンダールの概念はバイセクシュアリティの肯定宣言である」と受け止めていた。その上で波多野は「JASEのような日本の性教育界の指導者たちの基本的考え方とは一致していない」と分析している。

こうした波多野の指摘を踏まえると、カーケンダールは講演をするにあたり、当時の日本の一般の思潮を十分考慮し、講演に臨んでいたと考えられる。「バイセクシュアリティ」という用語を用いず、「家族同士のスキンシップの重要性」という形に表現で「家族」を主眼に論説した。そうすることで日本の聴衆に対し説得力を持って呼びかけることが可能となり、無用の誤解を受けることもなかったのである。

2) 啓蒙普及活動の周縁

ここまでみてきたように、1970年代の初頭の新しい性教育への期待が世論で高まる中で、カーケンダールは「新しい性の概念」として「セクシュアリティの概念の導入」を掲げ来日した。JASEの設立と活動への期待を表明すると共に、自ら意欲的に講演を展開することで「セクシュアリティの概念」の導入実践を創出する道筋を準備した。こうしたカーケンダールの主張は、学校保健界の性教育に対する受容や新しい性の理念への認識を高めることへと接続し、新しい性教育の理念を構築することへの提起に繋がっている。

こうしたカーケンダールの啓蒙普及活動の影響は、学会だけでなくそれら周縁においても派生していたと思われる。カーケンダール来日直前の1971年9月から12月には、兵庫県教育委員会からアメリカの性教育調査の長期研修に(兵庫県三原の)高校教諭らが参

加している。一行はアメリカ性教育界の第一人者としてオレゴン州ポートランドの太陽の丘にカーケンダールをたずね、研究テーマや著書等、アメリカ性教育一般に関するオリエンテーションの指導を直接受けている。このように、性教育に関心が高い現場の教員らを通して、カーケンダールの主張の一部は学校現場へと持ち込まれたことが推察される。後の日本の性教育言説へ接続する一助となったことが、こうした例からも示唆されるのである^{註7)}。

おわりに

本稿は1970年代初頭の日本の性教育の変革の動向を1971年に来日したカーケンダールを焦点にみてきた。本稿では4つの点を見出した。①カーケンダールは近代化に伴う家族内における人間関係の変化が現れているとして「セクシュアリティの概念の導入」を啓蒙した。その主張は「新しい時代の新しい性の概念」として講演やJASE等を通して広められ、日本の性教育の変革に大いに刺激を与えた。②カーケンダールは性教育指導者の資質としてセクシュアリティの概念を確立していることを重要視し、大学で「家族関係学」や「性教育」を設け、両輪で展開することを求めた。③カーケンダールの主張はバイセクシュアルの肯定宣言を孕んでいたが、日本の一般の思潮を考慮し「家族」をキーワードに説明することで、日本の聴衆に対し説得性を持って受容された。④従来、性に関し消極的だった学校保健界も時代の要請を理由にその扉を開くことを求められていた。アメリカからの健康教育を受け入れてきた歴史的背景から「アメリカ」からの「新しい性教育」として登場したカーケンダールを多少なりとも受け入れる要素を備えていた、ことを本稿で明らかにした。

最後に当時日本はユネスコに対し学校保健の振興を提案し、保健教育活動において世界に対し指導性をもつようになることを目指さんとしていた点も付記しておく。戦後性教育の道筋を解明するためにもこれら政府や学校保健会の動向の解明を今後の新たな課題としたい。

註

- 1) 1972年4月18日～23日大阪松阪屋、7月26日～30日東京銀座松阪屋などで性教育展が開催された。
- 2) カーケンダールの講演会は東京YMCA (YMCA内公開)、早稲田大学 (学内公開)、津田塾大学 (都内女子保健体育指導者)、東京大学 (健康教育懇談会)、朝日講堂 (一般公開)、エーザイホール (性教育を考える会)、木下学園 [広島] (純潔教育研究協議会)、大阪府中小企業会館 (日本性教育研究会)、

大阪毎日ホール (一般公開)、大阪府青少年会館 (日本学校保健学会年次大会)、東京学芸大学 (学内・同窓会公開) の11会場で開催された。座談会は大隅会館 (創始社ヒューマニストグループ)、大阪ロイヤルホテル (日本性教育協会発足準備委員)、エーザイ (性教育を考える会)、経営指導協会 (国内友人) の4会場で開催された。また、カーケンダールの活動を朝日新聞 (1971年10月12日) 東京新聞 (同年10月30日)、中日新聞 (11月8日)、日本テレビ放送 (11月8日)、毎日新聞 (11月10日) が報道した。カーケンダールの講演要旨については東京YMCA機関紙『東京青少年』 (1972年11月)、創造社同人機関誌『交心』 (1972年12月)、青少年問題研究会機関紙『青少年問題』 (1972年12月)、『性教育を考える会会誌』 (1971年12月)、『日本学校保健研究』 (1972年1月)、『純潔教育研究協議会研究集録』 (1972年4月)、日本性教育協会機関誌『現代性教育研究』 (1972年4月、7月) で紹介された。(波多野義郎・黒田芳夫：L.Aカーケンダールの性教育論：東京学芸大学紀要第5部門芸術・体育 (24)、1972、164-177)

- 3) 『財団法人日本性教育協会20年』にはカーケンダールの来日時の写真が掲載されている。
- 4) 日本性教育協会編：季刊現代性教育研究：小学館、1972 123-137
- 5) 日本性教育協会編：現代性教育研究 季刊2：小学館、1972、96-106
- 6) 第18回日本学校保健学会は昭和46年11月4、5日に大阪府立青少年会館で開催された (会長：伊東祐一)。演題数133題。パネル討議は司会を詫間晋平 (大阪教育大学助教授)、通訳に波多野義郎 (東京学芸大学助教授)、特別発言者に黒田芳夫 (東京学芸大学教授)、黒川義和 (大阪府科学教育センター室長)、佐守信男 (神戸大学教育学部教授) で行われた。
- 7) 『学校保健百年史』には「大阪を中心として日本性教育研究会が結成され、昭和47年2月には全国組織として財団法人日本性教育協会が設立され、性教育のための資料の作成や情報の収集の中心的役割を果たすようになってきたことは特筆すべきことである」との記載がある。(文部省監修・日本学校保健会編：学校保健百年史：第一法規、1973、329-334) 日本性教育研究会、JASE発足準備委員のいずれに対してもカーケンダールは講演を行った。

参考・引用文献

- ・波多野義郎・黒田芳夫：L.Aカーケンダールの性教育論。東京学芸大学紀要第5部門芸術・体育 (24)：

164-177. 1972

- ・増谷達之輔：青少年問題第 18 巻第 12 号. (財) 青少年問題研究会：29-33. 1971
- ・鹿間久美子：性の健康教育と養護教諭の役割～ L.A カークエンダールの性教育論をもとにした理論と実践の研究～. 考古堂：2010
- ・広瀬裕子：一部の「過激」な性教育ではなく主流言説をターゲットとした 2000 年代性教育批判の構図—『現代性教育研究』による性教育主流言説の形成を手掛かりとして—. 専修大学社会科学年報第 50 号：303-314. 2016
- ・池谷壽夫：純潔教育に見る家族のセクシュアリティとジェンダー純潔教育家族像から 60 年代家族へ. 教育学研究 68 (3). 16-27. 2001.
- ・(財)日本性教育協会事務局：日本性教育協会 20 年史.

(財) 日本性教育協会事務局. 12-31. 1990

- ・日本性教育協会編：現代性教育研究 季刊 2. 小学館. 196-106. 1972
- ・村上賢三：日本学校保健学会 20 年史. 日本学校保健学会：99-103. 1974.
- ・日本学校保健学会編：学校保健研究 Vol14. No1 通巻第 144 号. 保健研究社：16-26. 1972
- ・平井信義編：性教育指導事典. 帝国地方行政学会：146-152. 1972
- ・文部省監修・日本学校保健会編：学校保健百年史. 第一法規：329-334. 1973

本研究は JSPS 科研費 基盤研究 (c)「戦後日本における性教育構築プロセスに関する歴史社会学的研究」19K02092 の助成を受けた研究の一部である。

Aspects of the Acceptance of the Concept of Sexuality in the Early 1970s — Focusing on Kirkendall LA's theory of sex education —

Yoriko Yanagizono

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Keywords: sexuality, Kirkendall, women's lib, JASE, Japan Association of School Health Sciences

Abstract

In the early 1970's, the worldwide women's lib movement in Japan triggered a growing interest in sexuality, and in 1971, Kirkendall, founder of SEICUS, visited Japan for the first time and gave lectures in 11 locations throughout the country. Kirkendall called for the introduction of the concept of sexuality as a new era of sex education and expressed his hope for the establishment of JASE. The school health community, which had been reluctant to accept sexuality education in the past, turned to accept it in response to the needs of the times, and actively introduced Kirkendall to the public. The activities to popularize and educate the concept of sexuality are believed to have stimulated the later sex education enlightenment movement in Japan. This paper examines the historical process and significance of the connection by questioning the historical context of the transfer process of the American concept and how the emergence of a new theory of sexuality education, which is mainly based on the concept of sexuality, contributed to the formation of a proactive discourse of sex education in Japan later from the "purity education" promoted by the postwar government initiative.
